

深い学びを具現化した授業づくり

-総合的な学習の時間の授業実践から見通した国語科の授業提案-

高度学校教育実践専攻
学習指導力開発コース
加藤 由起子

実習責任教員 金 児 正 史
実習指導教員 泰 山 裕

キーワード：深い学び, 総合的な学習の時間, 探究的な学習

第1章 問題の所在と本研究の目的

1.1 問題の所在

筆者は、中学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編を読む中で、これからの学校教育では、主体的・対話的だけではなく、深い学びでの授業改善を強調していることを知った。そこで筆者は、「主体的・対話的で深い学び」の視点で国語科の授業を再構築したいと考えた。

1.2 本研究の目的

本研究の目的は、深い学びを具現化する学習場面として総合的な学習の時間を活用し、総合的な学習の時間において「主体的・対話的で深い学び」を意識化した授業の開発とその実践を行い、この実践から得られた知見を活かして、国語科の授業を提案することである。

第2章 本研究の方法

本研究は、次の①～⑦の順で進めた。

- ① これまでの自分の授業実践を振り返る。
- ② これまでの自分の実践で欠けていた深い学びについて文献調査をする。
- ③ 深い学びの実現を目指した各教科の先行実践を調査し、国語科の実践に活かせる知見を模索する。
- ④ ③の知見から得た、深い学びを具現化する学習指導として、筆者が指導可能な総合的な学習の時間を想定する。深い学びを具現化するための主題は、環境を想定して授業(以下、本授業)を構想する。

⑤ 本授業を実践し、生徒の反応を分析・考察する。

⑥ 本授業の分析・考察から深い学びに関する知見を見いだす。

⑦ 本授業を通して得られた深い学びに関する知見を活かし、国語科で「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業を提案する。

第3章 深い学びの先行研究と深い学びの定義

3.1 深い学びの背景

平成28年の中央教育審議会答申(以下、答申)で、変化の激しい社会を生きぬくための「生きる力」の育成に必要な資質・能力の3つの柱として、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」が示された。そして、この3つの資質・能力を育むための授業改善の視点として、「主体的・対話的で深い学び」が位置づけられた。

3.2 深い学びの定義

答申は、深い学びについて、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだし解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」と定義している。これを受けて、複数の研究者が深い学びについて独自に定義しているが、本研究では深い学びの出発点となった答申の深い学びの定

義を援用する。

3.3 深い学びの実現を目指した各教科の先行実践の調査

各教科の先行実践を調査した結果、算数・数学科や理科、社会科などで、探究的で横断的な授業が多く実践されていることが分かった。

3.4 深い学びの先行研究から得られた知見

筆者は、深い学びに関する記述について、小・中学校学習指導要領解説を参照した。その結果、算数・数学科、社会科、理科の3教科の記述には、探究という言葉が頻出していることが分かった。また、社会科の先行実践では、教科横断的な学習事例が多かった。そこで、探究的で教科横断的な学習を、総合的な学習の時間で具現化し、授業実践を通して得られた知見を、国語科でも活かせるのではないかと考えた。

第4章 総合的な学習の時間の創設の背景と目標の変遷

総合的な学習の時間の調査の結果、平成10年の学習指導要領の総合的な学習の時間の考え方が、それ以降も継承され、探究的・横断的学習が総合的な学習の時間において重視され続けていることが分かった。総合的な学習の時間の目標を比較すると、創設時から変わらず、探究的・横断的学習は総合的な学習の時間の最も重要な視点である。このことから、総合的な学習の時間で授業実践することこそ、自分の考える深い学びが具現化できると確信した。

第5章 本授業の構想と内容

5.1 本授業で深い学びを実現するための視点

本授業で深い学びを実現するための授業構想の視点は3つある。1つめは、身近な課題を設定することである。身近な課題を設定することで、生徒が学習に主体的に取り組めるようにしたいからである。この視点の根拠として学習指

導要領とARCSモデルを参照した。2つめは、教師が各教科を意識し、教科横断的な授業設計をすることである。教科横断的な授業設計をすることで、生徒が海の環境問題を、総合的・多面的に捉えられるようにしたいと考えたからである。この根拠として、樋口(1982)とD・A・スーザ、T・ピレッキ(2013, 胸組訳2017)を参照した。3つめは、視点1, 2をうけ、生徒の自由な探究を促す場づくりをすることである。なぜなら、生徒にとって興味・関心のあることを追究できるようにしたいと考えたからである。

この3つの視点をもとに、本授業では、生徒の生活に身近な海をテーマに、教科横断が可能な環境問題を取り上げた。そして、課題を解決するため、生徒が課題を途中で変更できるような授業を構想した。

5.2 本授業の概要

対象の生徒 中学校2年生26名

第1次の生徒の学習活動

- ①身近な海のゴミから、マイクロプラスチックに注目する(4時間)
- ②プラスチック問題について疑問をもつ(1時間)
- ③第1回調査をし、第1回レポートを書き、さらに疑問を挙げ、第2回調査をする(3時間)
- ④第2回調査で分かったことを第2回レポートにまとめたあと、解決法を考える(1時間)

第2次の生徒の学習活動

- ⑤解決法ごとにグループで調査する(7時間)
- ⑥インタビューや現地調査などをする(2時間)
- ⑦調査内容を報告会で共有する(2時間)
- ⑧報告会で挙げた課題を調査する(2時間)

第3次の生徒の学習活動(予定)

- ⑨学習をまとめ、発表原稿を書く(4時間)
- ⑩発表会を行う(1時間)
- ⑪学習の振り返りをし、意見文を書く(1時間)

第6章 本授業の実際

6.1 第1次の授業の実際

①導入で、学校の前の漁港のゴミを想起させ、ペットボトルの水にマイクロプラスチックが混入しているという調査結果を示した。生徒は驚き深刻な表情になった。その後、大学教授の講演を聞き、プラスチックに関する基本的な知識を得た。そして、近隣の海岸の砂を水と混ぜ、ろ過する実験を行った。

②講演と実験で得た知識や経験をもとに、生徒が86の疑問を出した。

③生徒は②で挙げた疑問から関心のあるものを選び個人で調査した。主に、インターネットを使用した。その際、情報の出典を確認し、正しい情報が判断することなど、情報の信頼性について指導した。第1回調査を終えた後、第1回レポートをまとめ、全員で読んだ。読みながら、疑問をもったところ、もっと知りたいところをチェックし、疑問点をレポートの作成者に直接質問した。

④第1回レポートから挙げた疑問点について第2回調査をし、第2回レポートにまとめた。

6.2 第2次(⑤⑥, ⑦⑧)の授業の実際

⑤⑥第1次の④で考えた解決法をもとに、生徒同士で相談して研究グループを作り調査した。

⑦⑧調査の途中で、報告会を2回開いた。円になって座り、調査で分かったことと今後の課題を発表した。その際、疑問があれば発表の途中でも質問した。報告会の後、各グループで追加調査すべき点を検討し、再度調査した。

6.3 第3次で予定している授業

⑨学級発表会、市立図書館の掲示による発表、徳島県環境学習フォーラムでの発表、新聞投稿という4つの場での発表を予定している。

⑩展示による発表で、見学者に感想をもらう。

⑩学習を振り返り、環境問題をテーマとした500字程度の意見文を書くことにしている。

第7章 総合的な学習の時間(環境)における深い学びの分析と考察

7.1 生徒の深い学びの分析と考察

7.1.1 生徒の深い学びを読み取る方策

・マッピングから、言葉同士のつながりを比較し、何が追加されたか等を読み取る。

・レポートから、調査のテーマがどう変わったのか等を読み取る。

・振り返りシートの記述を比較し、付加、修正、強化されたところを読み取る。

・観察記録から、情報に対し疑問をもつてとらえ解決策を考えているか等を読み取る。

・必要に応じて行ったインタビューから、生徒の考えの変化やその要因を聞き取る。

・発表原稿や意見文から、その他の環境問題にも着目し、今後の自分の行動を考えているかを読み取る。

本授業では、筆者の深い学びの定義にある学びが、生徒の姿から次のように見えてきた。

①知識を相互に関連づけてより深く理解し、そこから問題を見いだして解決策を考えたケース

②情報を精査して考えを形成したケース

③問題を見いだして解決策を考え、思いや考えを基に新たな考えを創造したケース

要旨では、②のケースについて生徒の活動を7.1.2に示す。報告書にはすべて示す。

7.1.2 情報を精査し、考えを形成したケース

生徒は、第1回レポートで、プラスチックが動物に与える被害を調査した。その中で、死んだクジラの口からプラスチックゴミがあふれている写真を掲載した。これに対し、他の生徒から「この写真、本物？」という疑問が挙げられた。生徒は、その言葉を聞き入れ、第2回調査の課題

とし、改めて写真について調べ、それがアート作品であることを知った。さらに調べると、動物の被害が甚大であることを世界に訴えるために作品が作られたことを知った。生徒は、これ以降、調査を慎重に進めるようになった。このことから、生徒は、情報を精査し、調査は信頼できる情報に基づかなければならないと考えたことが明らかである。

7.2 本授業の成果と課題

本授業では、生徒が知識を相互に関連づけてより深く理解し、そこから問題を見いだして解決策を考えたり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考え、新たな考えをもったりする深い学びが実現できた。一方、生徒の学習内容について、詳細に把握することが難しく、丁寧に指導できなかつたこと、実験や専門家の講演などの機会が少なかつたことが課題として残った。次章で提案する国語科の提案授業は、この2点の課題の解決を目指すとともに深い学びの3視点を組み込んで構想した。

第8章 本授業から得た深い学びの視点で構想した国語科の提案授業

8.1 国語科の提案授業

「走れメロス」を教材とし、生徒が自ら疑問を持ちながら読み、解明するために調べ、共有しより深く読み味わうという授業を構想した。

8.1.1 単元「走れメロス」をとことん読み味わおう

8.1.2 授業の概要

対象の生徒 中学校2年生 全13時間

8.1.3 単元に入る前の準備

生徒にとって身近な課題を設定するため、単元に入る前、朝の読書や図書の見出しによって作品や作者に興味をもたせることにする。

8.1.4 提案授業の学習活動

第1次 小説を通読し、疑問を出し合う。疑問のうち、「走れメロスの舞台となったのはどのような場所か」という疑問を取り上げ、グループになって調査し、共有する。(4時間)

第2次 本文をゆっくりと精読しながら、生徒が疑問を出し、グループで調査し、共有する。調査は、教科の枠を越えて行う。(5時間)

第3次 「メロスは勇者なのか」に対し、調べたり話し合ったりして迫っていく。(4時間)

8.1.5 提案授業を実践したときに想定される生徒の反応例

〈情報を精査し、考えを形成するケース〉

生徒は「ディオニスはなぜ残虐な王になったのか」という問いを立て、本文を精読した。そこで、ディオニスが処刑した人物とその順番を書き出すと、王位と関係する順に処刑されたことが分かってきた。古代ギリシャの歴史を調査すると、その時代の王は命を狙われる危険に晒されることがよくあったことを知った。「2年前までは町は賑やかだった」という記述から、生徒は、「ディオニスは、平和的な王だった。あるときから自分の命を狙われていると考え、疑わしい人間を順に処刑したが、暗殺の危険が続いたため、最終的に誰も信じられなくなったのかもしれない」という考えをもった。

第9章 本研究の成果と課題

本研究の最も大きな成果は、筆者が授業において、教科横断の意識をもつことができたということである。一方、深い学びについて多くの参考文献を参照したものの、どの文献が最も自分の考えに合致するかを絞りきれなかつたこと、深い学びを実現するための3つの視点を重視してきたが、これで確定なのではなく、そのほかにも多くの視点があることを今後考えなくてはならないということが課題として残った。